

エピダウロスに着想するギリシャの風土に根ざした演劇的空間 を核とした現代の癒しの場の構築

日大生産工(院) ○内野 佳音
日大生産工 篠崎 健一 日大生産工 塩川 博義

1. 背景

卒業研究において、ロマネスク様式の建築である「ル・トロネ修道院」に着目し、シトー会ロマネスク建築が持つ空間的思考をフェルナン＝プイヨン著『粗い石』から読み取った。読み取った石への動作一つ一つへこだわりを持つ考えと設計段階から考えられる空間への携わる人々の信念に着想を得て、「ル・トロネ修道院」の前身であった「フロリエル修道院」の身廊だけが取り残された場所において、修道院が持っていたであろう回廊で、身廊やその周辺自然を囲む新たな回廊を計画した (Fig. 1)。本研究では、更に時代を遡り、建築の始原となるギリシャ様式の建築の空間解釈を探求する。



Fig. 1 卒業設計で行った計画

2. 目的

卒業研究での研究を経て、建築の始原と言われるギリシャ様式の建築から、研究の着想を得る。ギリシャ様式の建築において最も尊重されているのはギリシャの神々である。ギリシャの神々を祀る神殿が今でも多く残ることや、建築史においても、重要な建築的文化財であることからギリシャ神に対するの信仰や認識は今でも根強く残っていると見える¹⁾。ギリシャ神が祀られ、神々との繋がりをもつことから神域となっている建築は、神殿建築だけではない。ギリシャにおける劇場建築においても神域となることがある^{1)*2)}。現代に最も当時と変わらぬ姿で残る「エピダウロス」³⁾もその一つである。「エピダウロス」は、「アスクレピオス」¹⁾が人間であったときに作った診療所が始まりであるため、ここでは「アスクレピオス」が祀られている。そして「エピダウロス」は、劇場を主役とした施設ではなく、身体と精神の癒す総合的な場である。演劇や食事、スポーツ、音楽、夢治療などの空間が、周辺の山の角度や土地に対する信仰心から生まれる秩序において配置されており、ギリシャの周囲や天空、自然と一体となって働いている。本計画は、現代のエピダウロスをギリシャの360度円形舞台で演じられる演劇的空間を核として、ギリシャ特有の信仰心と文化、土地との関係において構築する。

*1) 預言の神アポロンとメッセニア人レウキッポスの娘アルシノエーか、テッサリア王フュレギアースの娘コロニスとの間に生まれた子である。出生地は、テッサリアのトリッケかエピダウロスだと言われている。ケンタウロス族のケイローンから医術を学び、やがて死者をも蘇らす力を持つに至り、星座(蛇遣い座)となった。

*2) ギリシャの時代、ギリシャ人たちは身の回りに起こる説明のつかない出来事を神のせいだということにし、正体のわからない恐怖への理解としていた。加えて、ギリシャの人々は、何事もギリシャ神に信託を求めて行動し、未来への確証を持ってから行動を起こすという性格も持っていた。このことがより、ギリシャ神話の発展を促し、人々の中で神々の物語は口伝いに広がっていった。そして神々へ捧げる神殿や演劇を行う劇場が増えていったと考えられる¹⁾。

*3) エピダウロスの劇場は、医神アスクレピオスの聖域にある。ここは仮眠所(夢診断のため)、運動場と体育館(新陳代謝を促進するため)、風呂(衛生と癒しのため)、音楽堂(ミュージック・セラピー)などとさまざまな医療施設があり、劇場もそのひとつだった。ここで上演される「劇は、おそらく「アスクレピオスのもの」や負傷者・病人の「治癒物語」が多かったと想像できる。ことによれば、「治療の一貫」としてふさわしい題材が特に選ばれて上演されていたのかもしれない。

Construction of a contemporary healing space with a theatrical space rooted in the Greek climate inspired by Epidauros at its core.

Kanon UCHINO, Kenichi SHINOZAKI and Hiroyoshi SHIOKAWA



Fig. 2 エピダウロスの配置図

3. 研究方法

「エピダウロス」の空間が持つ、身体と精神を癒す力と、風土と信仰の関係に焦点をおく。劇場や音楽堂、運動場、宿泊施設、お風呂場、神殿などのさまざまな機能の建築的空間を、文献と現存する図面と現在の地形から読み解き、現代の人々の心をとかすような建築を構築する着想を得る。

3. 1. 文献調査

ギリシャ哲学による、ギリシャ建築が持つ空間のつくられ方を、竺覚暁著の『建築の誕生』²⁾と周藤芳幸、澤田典子著の『ギリシャ建築遺跡事典』⁴⁾から読み解く。そしてギリシャ神話による、ギリシャに根付く風土や信仰を、山形

治江著の『ギリシャ劇大全』¹⁾と左近司祥子著の『ギリシャ哲学の読み方・考え方』³⁾から読み解く。そして「エピダウロス」, 「古代エピダウロス」*4, 「アクロポリスの南麓」*5, 「ペルガモン」*6, 「アスクレペイオン」*7などの劇場をもつ多くのギリシャの遺跡が, 「アスクレピオス」を崇めていることがわかる。

3. 2. データ分析

周藤芳幸、澤田典子著の『ギリシャ建築遺跡事典』⁴⁾に掲載されている「エピダウロス」の劇場とその周りの建築の図面を利用し、新たに作成を行う (Fig. 2)。自分で線をひいていくことで空間の成り立ちを想像する。そして現在

*4) ギリシャの都市エピダウロスにある劇場で、アスクレピオスの聖域に捧げられた南東端に位置している。

*5) アクロポリスの南麓にあるアスクレピオス神を祀る神域

*6) アスクレピオスを祀るアクロポリス上部の急な西斜面にあるヘレニズム劇場

*7) ギリシャのコス島にある、アスクレピオスを祀る遺跡

の地形のデータを用いてエピダウロスに存在する多くの建築がどういう土地にどういう向きで配置されているのか、建築と土地の関係を明らかにする。

4. 敷地決定と計画

文献調査で明らかになった、劇場をもつギリシャ遺跡の多くが医神として祀っている「アスクレピオス」*1に着目する。山川廣司著の『古代ギリシアのエピダウロス巡礼・アスクレピオスの治療祭儀』から、神域アスクレピオンで行われる治療において、演劇というものが古代ギリシャでは人々の治療の段階の一つ*3として用いられていたため、劇場やその他の機能の建築をあわせてその全てが人々の治療のための空間である⁹⁾。「エピダウロス」に着想を得ていることから、ギリシャのコス島にある「アスクレペイオン」に計画を行う。「アスクレペイオン」では、「アスクレピオス」を祀っているが、現在劇場がなく、観光地としての利用しかなされていない。「アスクレピオス」を祀る神域として現代に通ずる、劇場をもつ人々の治療施設を計画する。エピダウロスの建築たちが「アスクレピオス」の治療に必要であったように、現代の人々の治療のために必要な機能を付随させ、この地において演劇的空間を核とした現代の癒しの場の構築を行う (Fig. 3)。

5. エピダウロスに着想を得た空間構成

「アスクレピオス」が行なった、神域アスクレピオンでその後しばらく続いた治療方法*8を基に、現代の人々に通ずる機能を設定する。「神域への入り口において訪問者を神に認識させる→人の生活において付いてしまう、負の感情などの汚れを水で洗い流す→同じ考えや趣味を持つ人と共有し、コミュニケーションをとることで心を開く→芸術や音楽、劇を通して心を浄化する→神域に留まり、祈ることで心も体も癒されていく」という構想を行う。この構

想に沿う機能と人々の視線を通らせるための建築そのものの軸を決める (表. 1)。



Fig. 3 アスクレペイオンのあるギリシャのコス島

表. 1 訪れることで感じられる効果と機能

効果	動作	機能	開口軸
神に認識される	神域の入口	エントランス	アスクレペイオン神殿方向
汚れを落とす	水で洗い流す	足湯 お風呂 スバ	上下
心を開く	人と好きなものを共有して話す	図書 ジム カフェ	前後左右
心を浄化する	綺麗なものを通して感情を浄化する	音楽堂 ギャラリー 劇場 レストラン	360度 (直射日光を避ける)
留まる 祈る	神域に身を委ねる	ホテル 神殿	好きな方向

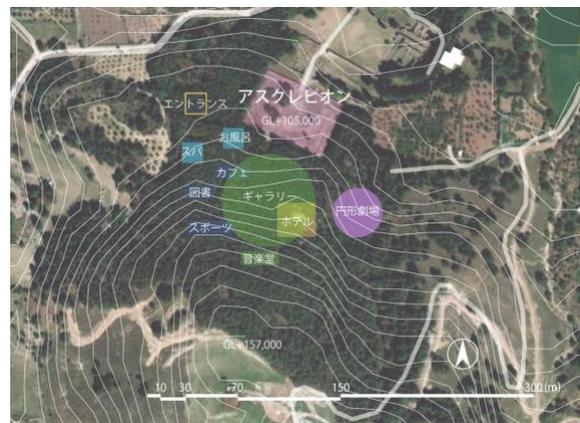


Fig. 4 治療の効果を持つ複合施設の配置計画

*8) “1ステップでは、カタルシスまたは浄化段階である。患者が一連の入浴や、数日間にわたるきれいな食事や芸術を通して感情を浄化する。その後、患者は神殿にてアスクレピオスにお金や祈りなどの供物をする。神殿の僧侶は、患者の心を和らげ、より前向きな見方をするように患者に祈りを捧げる。

2ステップでは、夢の治療が行われる。患者は、アスクレピオンにある寮である「アバトン」または「エンコイメトリオン」で眠る。ここで、彼らは幻覚剤によって引き起こされたと思われる催眠状態に落ち着き、夢の旅を始める。彼らが眠っている間、彼らはアスクレピオスまたは彼の娘のヒュギエイアとパナケイアによって夢に訪問される。これらの夢の訪問は本質的に予後であり、病気の予測される経過と最終的な患者の転帰を明らかにする。この間、患者はまた病気を治療するために目が覚めたら何をする必要があるかを発見することができる。目覚めたとき、患者は彼らの夢を神殿の僧侶に語り、神殿の僧侶は彼らの解釈に基づいて治療を処方する。他の夢は直接的ではなく、より象徴的であった。医師・アスクレピオンズの司祭は患者の夢の説明から、従うべき治療を行う夢の通訳でした。アスクレピオス神には特定のトーテム動物がいて、その装いでサブリカントが眠っているときにサブリカントを訪ねることが好きでした。これらは犬、オンドリ、そしてヘビでした。”⁹⁾

そして(表. 1)から人々の過ごし方を想像し、行き交う人の動線から考えた、空間の配置を決定する(Fig. 4)。

6. 空間に影響する光と風と人々の視線

(Fig. 2)より「エピダウロス」において、太陽の光が1日の最初に差し込む空間を神殿とおき、さまざまな機能をもつ建築が劇場の背景や音の反射のために利用され、人の動線は光の方向へ持っていくため北から南に誘導していく構成となっている。本計画において、光を取り込みたい時間や量、抜ける風と目線を考え、建築の軸を振っていく(Fig. 5)。



Fig. 5 光と風と目線により振った軸

7. 演劇的空間を核とした現代の癒しの場の構築

光や風、人々の目線に着目した構想と、円形劇場で上演するギリシャ劇における決定された日時から^{1) 5)}、本計画では、上映時間と日時を決めて行う。軸を振った空間において、ギリシャ劇の内容に合う日や時間を設定することで、真っ暗闇に光が差し込む表現や、段々とオレンジ色に染まる表現や、段々暗闇に向かっていくような表現を行うことが可能となる。(Fig. 3)より、計画地は周囲よりレベルが高いので、人々が先の海まで見渡せ、水平線に沈んでいく太陽も目に映るような劇場となる。円形劇場を基にした劇場空間から人々は、時間によって見せる顔を変える空間を背景にギリシャ劇を楽しむことができる。そして、海から吹き抜ける風を取り込むように開けた連なる開口が全体に爽やかな風を運んでいく。

今後は、ギリシャの風土とギリシャ劇への見識をさらに深めながら具体的な空間構成を進めていく。

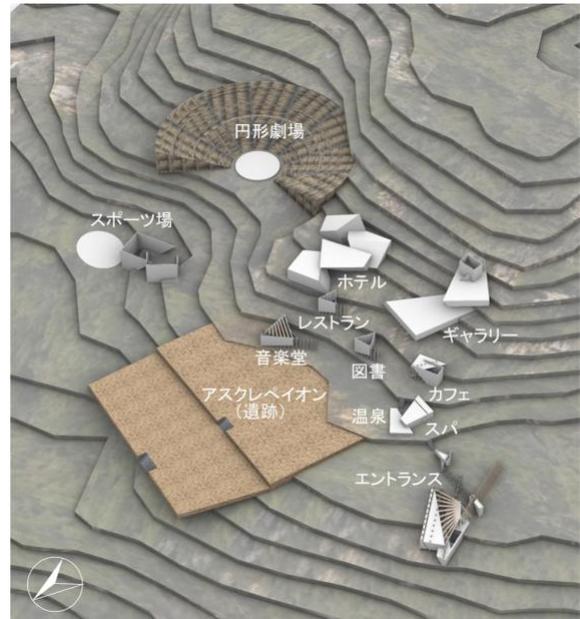


Fig. 6 計画する複合施設配置図

参考文献

- 1) 山形治江, ギリシャ劇大全, 論創社, (2010)
- 2) 竺覚暁, 建築の誕生, 中央公論美術出版, (1981)
- 3) 左近司祥子, ギリシャ哲学の読み方・考え方, 大和書房 (2017)
- 4) 周藤芳幸, 澤田典子, ギリシャ建築遺跡事典, 東京堂出版, (2004) pp. 113-143.
- 5) George Pantazi, The Astronomical Orientation of Ancient Greek Theatres in Relation to the Topography and the Greek Mythology, (2017)
- 6) R・ヴェンチャーリ, 建築の多様性と対立性, 鹿島出版会 (1982)
- 7) H. R. Goette, E. Csapo, P. Wilson, J. R. Green, Greek Theatre in the Fourth Century B.C., De Gruyter, (2014) pp. 15-76.
- 8) URL, <https://www.metoffice.gov.uk/weather/forecast/swel1pzzxg0#?date=2022-10-06>
- 9) 山川廣司, 古代ギリシアのエピダウロス巡礼 - アスクレピオスの治療祭儀 -, (2006) pp.186-198,